

公害被害の現地で

その住民運動から学ぼう

環境科学コース4年 黒岩 祐治

すでに3年余りの月日・歳月が過ぎ去った。教養部が総合科学部と名を替えて——。そして私は、環境科学コースで3年余り学んできました。が、先生方には積極的に総合的に公害問題に取り組もうという意志が感じられず、むしろ……

1 公害タレ流し教育の現場——大学——

先生方が公害のことに言及する場合、しばしば「近年公害問題がやかましくなりました云々」と言われます。この発想は「私は公害問題との関わりは無し、公害問題などそれほどのことでもないのに、世間やマスコミは騒ぎすぎる」という本音から出るのでしょう。実際、学生や世間が問題にやかましく騒いだので、何十年とタレ流してきた水銀・カドミウム・鉛等々の重金属、ホルマリン・四塩化炭素などの有機溶媒はタレ流さずにとっておいて、処理施設で処理しようと規則を決め実施しているのでしょう。（学内誌「広大環境」：排水処理対策委員会）しかし、周囲がやかましいから処理してるんだという発想では、やかましくなくなれば本音が出てきます。僕ら4年生が2年の時の重金属分析の実験で、教官自らが濃厚な六価クロム廃液を指導すべき学生の面前でタレ流したり（洗浄液のクロム酸混液に浸けたガラス器具を、廃液を受ける容器を何も用意せずに流して水洗い）、また水銀・カドミウム・鉛などの重金属についてもタレ流しを放任して知らん顔。その学生実験室には、タレ流しをしてはならないという先生方が作られた規則がちゃんと貼ってありました。僕ら学生はそれをレポートとして写させられました。にも関わらずこういうタレ流しが公然とまかり通っている。止むに止まれず抗議を申し込むと「あれはミスじゃ。」との言。何か試薬を入れ間違えるとか、入れ忘れるとかなら「ミス」でも済ませよう。（これは危険なミスだが。）しかしこの場合は、指導教官が自ら手をとってこうやるのだという手本を見せたにも等しい行為であった。また「あれは間違っていたと君ら学生に訂正を言いに行く」ともその教官は言われたが、今だに聞かない。これは一例に過ぎず、公害を軽視する講義を、「教授」を始めとする先生達から日常的に聞いてきました。

2 環境行政・環境科学コースの出現は公害被害者の上に

さて、ひどくなった公害をなくさねばいかんという一般庶民の感覚から、大学がかけ離れた性格をもちつつも最近外見的には変化が見られます。つまり、マスコミはもちろんのこと、産業界・政府（行政）・大学が少なからず“環境問題”を取り上げるようになったことです。それはどうしてでしょうか？実は“環境行政や環境科学”がなくても公害がない状態が最も望ましいわけです。もしそうなら、私はこのような文章を書いてはいない。でも現実はそのではない。古くは、明治時代の足尾鉍毒事件の谷中村・渡良瀬川流域（友人2人と私は今年の1月初め、足尾銅山現地および渡良瀬川下流の強制取りこわしを受け今は遊水池となっている旧谷中村現地を訪れ、またずっとこのことを調べておられる豆腐屋のお爺さんの話を聴かせてもらいました。）以来、明治・大正・昭和の前期—と数は少ないが極地的にはひどい公害は発生しており、それに対する住民の反対運動は進められました。しかし、戦争時には中断せざるを得ず公害はひどくなりました。（宮本憲一「日本の環境問題」の日本公害史、宇井純「公害原論I」）

そして敗戦後、池田内閣の下で急激な“高度経済成長政策—農林漁業切り捨て政策”が始まり、一気に公害は全国へと広がりました。（私はほとんど何もしていないのに名を借りるのは、本当に失礼なのですが）南は沖縄で米軍基地・金武湾埋立石油基地化に反対する人々、……、九州で水俣病に苦しむ十万に及ぶ人々、「スモッグの下でのピフテキより青空の下での梅干を！」と志布志湾埋立・石油化学コンビート化に反対し農漁業で生きてゆこうとする人々、……、広島で海田湾埋立反対・ゴミ埋立公害に反対する人々（戸山、久地、瀬野川、三滝、戸坂、本誌前号参照）、騒音が激しく、不必要でもあるジェット機乗入れに反対する広島市民、激しい大気汚染をもたらす電力浪費型工場の為の火力発電所建設に反対する人々（安芸津、大崎、竹原、福山）、……、新幹線公害訴訟を起し闘う人々、……、北海道苫小牧巨大開発に反対する人々、……。

こういった、日本全国津々浦々のカネで自分の生命と健康を売ることを拒み、大自然と生活環境を守ろうとする人々（この中には皆さんの家族・親類の方もおられるでしょう）が公害の元凶となる企業を告発し、公害を止めよと迫り、また市町村・県・国を告発し、対策を迫ってきたからこそマスコミは報道するし、産業界・行政・大学は何らかの対策を講じざるを得ない状態になっているに過ぎないのだと思います。一方で、公害反対の住民運動が行政・企業および御用学者によって弱められ、切り崩され、潰され続けてきた結果が現在の「公害列島」を現出しているのではないのでしょうか。広島に住民運動に参加してしみじみ感じられることなのですが、公害の反対運動が弱まれば確実に明日にでも公害はひどくなるというのが現状です。この状況の中で、産業界・政府・文部省は自分らの勢力を補強し、住民運動に対処する為に予算・研究費の支給で「権威ある」大学の先生たちを取り込もうとします。（前々号の本誌参照）かくして、環境行政・環境科学コースは花やかな理想・理念とは異なる所から生まれてきたと言えそうです。

以上の如くの現状を見据えた上で、現在環境科学コースでの方針として話に上っている「クリーンエネルギー」研究と「生態学・環境学・環境調査」とを考えてみましょう。

3 「クリーンエネルギー」より「エネルギー浪費」を減らすことを

まず、「公害はたいしたことない」と思っている先生方が、どうして「公害を少なくする為」に一所懸命「クリーンエネルギー」を研究しますとおっしゃるのか不可解です。

第二に、もし本当に「公害を少なくする」気がお有りならば、一方で電力会社や電力多消費の大工場、製品の大量販売合戦にしのぎを削り排気ガス対策をなおざりにしてきた自動車会社等々の公害発生に目をつむっておられるはずはない。また地元広島のゴミ公害について話をされなければならない。この上、税金を使って「クリーンエネルギー」を大学が研究する必然性は薄い。

第三に、産業界自身エネルギーが足りない資源が足りないと言いながら、自ら使い捨て製品を大量に生産し宣伝・販売している。その上、その製品が捨てられた時のゴミ・産業廃棄物は、ゴミ処理場のある地域住民の犠牲の上に立って、これまた税金を使

って自治体に処理させるという有り様。これは広島市の瀬野川町でゴミ埋立に反対している住民の方の意見でもあります。このような無責任なエネルギー浪費をまずやめることを考えるべきではないのか。「クリーンエネルギー」研究は、当地広島のゴミ公害を減らすことには全くつながらず、むしろ「エネルギー消費から環境問題という足かせを取り除く」という産業界・政府の意向に沿うもののようにさえ受け取れるのである。

4 環境科学コース3年生の「要望書」・「生態学・環境学・環境調査」

環境科学コース3年生がこの3月にコースの先生方・学部長に対して「要望書」を提出しました。先生方の対応として、公害をなくするという目的意識を欠いた単なるコース内部の勢力争いに、その「要望書」を利用したふしがあるのは論外です。

3年生は、これまでのカリキュラムに沿った講義や先生方の考え方に影響を受けながらも、自分らの問題意識を先生方につけてみたことは一応は無意味なことではなかったように思われます。しかし、その内容と3年生自身の考え方には問題となる所が多い。まず、自分らの主張を大学の出した「募集要項」を引用して述べたり、「環境科学の立場に立った教授陣の充実を」と言いながら、自分が何をしたいのか、例えば何という先生を呼んでほしいのか不明であったりして、まず自分らの要望することに対する不勉強さが目立ちます。「環境科学」にしる「その立場に立った教授陣」にしる、上から与えられるのが当然という「棚からぼた餅」式に安易に考えているとしたら、とても改革など望めない。また（現在のが良いわけではありませんが）「カリキュラムの再編成」「群の解消」についても同じことが言えます。

さて次に移りましょう。先生方は「生態学・環境学・環境調査」について、日本内外の文献を研究し野外調査もされる。学生は、先生から与えられる講義を聞き本を読んで勉強する。これらのことを材料にして、現実のつぴきならない日本の公害問題を云々し「調査をして、そのデータから判断して対策を立てればよい」とよく言われる。しかし、現実の目の前で起きている広島の公害1つなくそうという努力もしない。ひいては自分の家族の身をも危うくする「広島の公害を住民運動と共になくす努力をしては」という提案には耳を貸さない。理想論ばかりの「机上の論」に終始していると判断されても仕方が

ない。これでは「生態学・環境学・環境調査」は現実と遊離し、「研究の為の研究」になり下がり公害を減らす手だてにはならないし、実際なっていない。実際的には産業・行政に「隠れミノ」として利用されるハメに落ち入るだろう（実際広島海田湾埋立計画、戸山ごみ埋立計画では計画を進める行政上の一手続として、住民の目をごまかす手段として使われている）。

5 自然を守り公害に反対する住民運動に学ぼう。

私は以上1, 2, 3, 4を皆さんにもう一度読み返してもらいたい。現状でカリキュラムの再検討・新任教員の人選とか、大学院をどうするのか等の機構いじりで事態がよくなるというのは幻想だということがお分かりでしょう。こう思われる方は、学生の中ばかりでなく、先生方の中にもおられるでしょう。

まず私たちは、広島公害発生の現地へ行き、公害被害者に会い、広島の自然を守り公害に反対する人々に会い、その人たちの話を聴き、すなおにその生活から学ぶことを開始しよう。現在発生している公害被害がいかにひどいものか。住民の健康と生活をいかに破壊し、広汎な被害を及ぼしているか。ひるがえって、大学でやっている教育・研究のどこがどのように公害を出す側に加担しているのか。「環境調査」では測れない美しくも複雑な自然の営みを学ぼう。「環境調査」で使う機械メーターが自然の姿を、住民に対する公害被害の姿を示すものかどうか。外部の人間の「環境調査」で住民が知っていることのどれだけのことが判るのか。それも正確に。

（何十年に一度の災害が、どのような所で、どのような時に、どの程度のもので、なぜ起きたのか、何をすると起きやすくなるのか等々地域に伝承されている生活の知恵）「環境調査」の項目にのらない自然の多様な面と不断に付き合っている住民の経験と、良好な自然環境なくして生活のあり得ない住民の鋭い観察力とを土台にしない産業・行政・学者の「環境調査」は、住民の環境を食いものにして「開発」する側＝産業・行政にとって有益なものとなる。——この事例を学ぼう。

今破壊されようとしている自然及び生活環境が、住民の方の朝から晩までの、四季を通じての、様々な天候の下での“なりわい”を支える場として、楽しき行事のくり広げられる空間として、幼き頃からの成長の場として、将来の子供らの生活・成長の場として、いかに「ええもん」かを学ぼう。その運動に加わる中で、公害をなくすにはどうしたらよいか——自分の生き方・暮らし方・考え方も育つでしょう。公害のない社会の有り様の手掛かりも模索できるでしょう。

私も、こんな文章書く暇があったら、公害をなくす為の運動をした方がよいのだ。

注1. 前号の「広島ごみ問題にみられる行政の犯罪性」p.11左三行目の「昨年策定の『第三次全国総合開発計画』を（『第三次全国開発計画』は昨年以來作成中）」に訂正いたします。

2. 前号の私の拙文の続きは次号に回させてもらいます。

教育実習を終えて

6月6日から2週間、総合科学部4年生の教職希望者31名が福山の附属高等学校・中学校で教育実習を行ってきました。総合科学部としてはもちろんのこと、受け入れ側の福山附属校も、一般科目の実習生は初めてで、使用参考書、学習進度など連絡が遅れ、4年生には気の毒なことも多かったようです。しかし教職希望者にとっては初めての現場。さて期待と不安、喜びと恐怖の感想をきいてみましょう。

越智 宏

「やっと終わった！」—これが2週間の教育実習

を終えた時の気持ちでした。

実習前日の日記を振り返ると、次の様な文字が並んでいました。「6月5日。明日から教育実習が始まる。短い期間だが、一日一日全力投球して、僕の習得した知識（勿論、底の浅いものではあるが、）の幾らかでも生徒達に伝えることが出来るよう、若さをぶつけて頑張ろう。」

いよいよ実習開始。生徒との生活が始まりました。「まがりなりにも俺は教師の卵だ。」という意気込みで教壇へ。然るに結果はさんざんでした。これも言ってやろう、あれも教えてやろうと、ものすごい

量の指導案を作ったりして、元気いっぱいでしたが、いざ授業を始めると、声がいつもと違い、上ずって、生徒の顔を見ようとしても見えず、膝頭は僕の意志とは無関係に震えていました。黒板の文字は、どれもアンバランスで、色チョークの使い過ぎか、訳のわからぬ塗り絵のようでした。そして、計画の半分も終わらないうちに、チャイムが鳴り始め、終わり。

こんな調子でしたから、実習前の意気揚々とした気持ちは、どこかへ吹っ飛んでしまいました。授業後の反省会で、担当の先生は、「まあ、最初ですからあんなものでしょう。」と言って元気づけて下さいましたが、僕自身は、内心ショックでいっぱいでした。「プロの先生とは違うのだから、気楽にやろう。だめでもととなんだから。」と自分に言い聞かせましたが、何か息苦しくなりました。「明後日もまた今日と同じ運命か？」などと考え、さらには「なんで福山まで来て、こんな目にあわなくてはいけないのだろう。いっそのこと広島へ帰ろうか。」とも思った程でした。

翌日、昨日の失敗で、何もする気がせず屋上でブラブラしていると、一人の男子生徒がやって来て、「先生、きのうはひどかったのお。でも、まあまあよ。明日はがんばって。」と言ってくれました。その時でした。「あ、そうか！俺は生徒のことは忘れていた。自分のことばかり考えていた。授業は、生徒と一緒にやるものだ。」そう考えると、生徒たちの顔がぼんやりと甦ってきました。「彼らは僕のひどい授業を熱心に聞いてくれたのだ。明日は彼らに教えるのではなくて、彼らと一緒に勉強していこう。」そう思うと、明日がなんだか待ち遠しくなりました。

「生徒は、僕の授業を聞いてくれているのだ。」と心でつぶやきながら、2回目の授業に臨むと、なんだか余裕をもってやれたのです。

こうして、3回、4回と回数を重ねるごとに僕自身、「やれるな」という気持ちに変わっていききました。……

以上が、教育実習を終えての僕の率直な回想です。そして、それを通して僕に与えられた確信は只次のこと。「実習を受けられるみなさん、授業なんて失敗してもいいのです。潔く花と散りなさい。生徒たちは、それにもかかわらず僕らの力強い味方なのですから。」

清水 冬絵

乱塾時代・落ちこぼれ教育・家庭教育の退廃…と教育問題の構造化が非難されている。本来選択科目である英語が、事実上強制されているのも上級学校進学熱による。大学入試制度改革が進められているが、学歴偏重社会は容易に改善され得ないだろう。こうした根の深い教育問題こそ現場教育から見直していかなければならない。

従来の不経済・非能率的英語教育が反省されているにもかかわらず、現場の学校英語は十年前の私の中学時代と変わらない。『何故まだこんな英語やってんの？』一十年後には「どうしたら英語が話せなくなるか」を語ることができるものの、英語の垂流なるジャパニーズイングリッシュで終わるのではなからうか。『それでは一体どんな英語をやればいいのか？』まず英語が腹式呼吸で発声され発音されることを振り返って、音声指導を徹底的にやるべきである。よく呼吸し、よく舌を動かす外国人にとっては、発音に関して日本語は易しく覚えが速いそうである。Hearing, Speaking の言語活動を中心とした語学教育に改善されねばならない。

「英語教師ならちっとは英語を話してみろ」と教師の再教育が叫ばれる。将来の教師となるべき実習生の教育実習の強化も同様に言えないか。教職課程さえあれば免許状が取得できるという、アメリカの開放制を導入している現在、教育実習は短期間の形式的なものに終わっている。実際に教師になる者の16倍の学生が実習を受けているところに問題がある。大学卒業段階で仮免とし、その後実習期間を設けるインターン制なり、Intensive course をとった留学による教師の再教育なりが提案されているが、なかなかそこまでいくには時間を要するだろう。

中学生の或るアンケート調査によると、彼らが英語を勉強するのは、将来外国へ行った時、日本にいる時と同じように話ができるようになるためだそうである。そのクラスで受験のためにやると答えたのは一人であった。語学教育は動機づけが弱くては効果があがらない。『何で英語をやるの？』と原点にもどって今後の英語教育を考えていかなければならないだろう。ナンデエイゴヤルノ？

榎 良輔

教育実習を経験したその感想を、ということであったので、実習に関連して印象に残っていることを

いくらか書いてみたい。

実習授業は社会科の場合、今回はひとり平均5回程度だったが、その準備の大変なことには一同まいったの感があった。

いったいに、ひとになにかを教える場合には、自分が教えようとするをつぶさに理解しておく必要があることは言うまでもないが、わかったつもりでいざ教案を書こうとすると案外うまくいかないことが多い。かくして夜中の1時、2時まで参考書やら指導書やらをひっくりかえしての悪戦苦闘が続くことにもなる。わかりやすく説明することの難しさを痛感した。それでもたまには教案がわりと良く書けたような気がするが、そんなとき教壇に立つと説明がスラスラでてくるが、授業の後での反省会に出ると、説明しすぎで生徒に考えさせる時間を与えていないという批評をもらうことが多かっ

た。授業では生徒に内容を理解してもらわねば話にならないのだが、実際やってみると説明がうまく続くときにかぎって居眠りが多い。授業中に生徒に歴史地図や用語集を見させて、そうした作業を通じて理解させる努力をしないと本当に生徒の頭に残らないと指導教官に指摘されてなるほどと思った。

ところで5回の実習授業のうち4回は同じクラスに出たが、これは決して多い回数ではない。にもかかわらず登下校時にはぼつぼつあいさつしてくれる生徒が現れる。実習授業も3回目頃からは慣れてきて授業に出るのが楽しくなってくる。そしてもう少しやりたいなあと思いはじめたころ、実習期間は終了となってしまった。

ひとことでいって非常に厳しかったが、また得るところの大きい実習であったと思う。

昭和51年度 学生生活調査報告

岩 村 聡

学生相談室では、主として総合科学部をめぐる学生生活の現状を把握し、その改善への資料とするため、昭和49年度から5カ年の予定で複数の調査計画を実施してきた。ここに報告するのは、そのうち例年秋から冬にかけて行なっている「学生生活調査」の集計結果である。この調査は、質問紙と回答紙をあわせて6ページ、記名式、30問という比較的小規模なものであるが、集計結果のすべてを紹介する紙面の余裕もないので詳細は別の機会に譲りたい。

なお、今回報告するのは主として昭和51年度の調査結果であるが、回収状況が悪かったため未公表の昭和50年度調査や、教授会への中間報告しか行っていない昭和49年度調査の結果も特徴的な部分について、関連して言及したい。

昭和51年度学生生活調査は、予算の制約で対象を総合科学部1～3年次生346名だけにしぼり、11月中旬から下旬にかけて配布、回収を行なった。配布については、1・2年次生は体育の先生方のご協力で、原則として体育実技の授業の際に手渡し、3年次生や配布もれの学生には、掲示板で広報して、各コースの研究室、厚生補導係、学生相談室等で受け取ってもらった。回収は、厚生補導係窓口回収箱を置き、そこへ投入してもらった。期日までに提出

のない学生への督促は、掲示板を利用したほか、1年次生に限って郵便も利用した。

この結果、回答者数等は表のとおりである。

	1年	2年	3年	計
男	65(70.7)	36(46.8)	27(31.4)	128(50.2)
女	23(69.7)	27(62.8)	4(26.7)	54(59.3)
計	88(70.4)	63(52.5)	31(30.7)	182(52.6)

()内は回収率

ご覧のとおり、1年次生の回収率はかなりよかったが、上級生、特に3年次生は30%程度しか回答が得られていないので、この結果が上級生の傾向を正確に代表しているとみなすことはできないであろう。

参考までに、昭和50年度の調査は総合科学部1.2年次生215名と、他の学部の1.2年次生から無作為に抽出した366名、計581名を対象に、1月上旬～中旬、すべて郵送で質問用紙を配布し、総合科学部生60名、他学部生96名、計156名から回答を得た(26.9%)。なお、このときは無記名式だったので、督促は行なえなかった。

1. 勉学

問1. 授業への出席状況は図1のとおりである。

ときどき欠席する程度が、学生として普通らしい。